

金基鎮のプロレタリア階級文学の原基とその契機

安 都 根

一 問題の提起

韓国現代文学の出発点を1923年のプロレタリア階級文学（以下、プロ文学、或いは階級文学）の新傾向派の出現とそれによる浪漫主義の克服にあったとするならば¹⁾、植民地朝鮮の黎明期文壇にプロ文学を紹介した、作家金基鎮（号は八峰、1903～1985年）の果たしたその役割に贅言など要しまい。とりわけ、1925年のKAPF（「朝鮮プロレタリア芸術家同盟」の略称。以下省略）の結成の主演の一人として、その理論的土台を構築した批評文学の開拓者でもあった金基鎮をめぐるのは、これまで数多くの研究が多岐に亘って論究しており、1920年、30年代の植民地朝鮮におけるプロレタリア文芸思潮を論じる際に避けては通れない主要人物の一人でもある。

小論は、「文芸思潮」の受容とその変容の視座から近代移行期の東アジア像の再構築という大課題の一環として作家金基鎮を取り上げ、これまでの研究に学びつつ、さらなる展望を示してみようとするものである。そこで、まずは、金基鎮をめぐるこれまでの主な研究動向を一瞥し、あわせてその問題点も含めて残された課題を指摘する中で、小論の具体的課題を提示しておきたい。

作家金基鎮をめぐるこれまでの研究を概括するならば、大別して、およそ次のように整理できよう。まず、留学先の東京での社会主義思想との出会いとKAPFの結成期における彼が果たした先駆者的役割という相貌²⁾、また、作家論的見地から彼の一連の評論と小説を中心とした研究がそれであり³⁾、さらには、プロ文学に対する立場とその姿勢といった文芸論的視点からなる一連の研究がみられ⁴⁾、とりわけ多くの研究が後者、即ち、作家の文学活動の主要部分

を占める批評を通して提起された文学論を中心とする議論が主流をなしている。

さて、これまでの研究の主流を占めてきた作家金基鎮の一連の評論に基づいた彼の文芸論に関する議論を見るならば、そのいずれにおいても、彼の階級文学論の未熟さ、或いはその限界性が指摘されており、それは、例えば「不十分な社会主義理論として、社会雰囲気と文壇の潮流に流れた速断的流行性の伝播」⁵⁾、また、「科学的分析に立脚した評論より、伝染性の強い随筆の類の作文が中心となっており、本質的に階級文学が定着するというよりは、むしろ革命的浪漫性の強い個人意識の表出」として理解され⁶⁾、金基鎮の初期社会主義思想とその文芸論は、結局のところ、「革命的浪漫性に満ちた個人意識の表出」として位置づけられる。

ところで、ここで指摘しておかねばならないことは、金基鎮におけるプロレタリア文芸論の脆弱、或いはその限界を指摘する如上の研究においては、その要因を、ただ植民地朝鮮と「帝国」日本との間における異なる時代的狀況、或いは作家自身における思想論理の不備によるものと理解されており、既往の研究が一様に指摘する、例えば、彼のプロ文学論における限界そのものが果たしてどこから起因するものであったかは、未だ明らかにされていないという点である。

改めて言うまでもなく、議論そのものがどのような立場、或いは視角からなされているかという、議論の背景的土台は、当然ながらそこから導き出されるその結果を強く規定するはずである。作家金基鎮の文芸論の限界に対する指摘は、要するに、彼の議論そのものが、そもそもどのような立場、視角に基づいてなされたものであったかという、その原点なるものに立ち返って再考すべき課題を今まさに我々の眼前に投げかけているといえよう。

実際、課題として小論が提起する既往研究の不備は、黎明期植民地文壇にプロレタリア階級文芸論という最先端の文芸思潮を紹介、移植し、先駆者的役割をまっとうした作家金基鎮の重み、また、それが故にこれまで彼に対するなみならぬ関心の表明からすれば、案外に看過されているところと言わざるを得ない。しかも、何よりも彼のプロレタリア文芸論の背景的事実の把握は、彼の階

級文学理論の土台となる原点とその帰着点の行方だけでなく、彼の階級文学理論の限界が何を意味するものであったかを算定する上で欠かせない前提課題となるという点を看過してはならない。

小論は、如上の課題認識に基づき、作家金基鎮におけるプロ文学の受容、及び植民地朝鮮への紹介とその移植は、果たしてどのような背景的土台からなされたかを確認する中で、既存の研究が残してきた課題に私なりの答えを用意してみようとするものである。おそらく、こうした一連の検討を通して、金基鎮のプロ文学論をめぐって交わされる文壇内部の一連の論争とその分岐はもちろんのこと、KAPFの結成とその帰着的行方に示される含意が指摘できるであろう。

そこで、より具体的には、まず、第一に、金基鎮のプロ文学への傾倒とその受容を、これまでの研究が等閑視してきた、例えば1920年代の植民地朝鮮の時代的状況を視野に入れた、より巨視的観点から脈絡的に跡付けて見たい。卑見によれば、作家、或いは文壇の「主義」は、決して偶然的産物ではなく、むしろ当該社会の時代的要請の結果であり、逆に、作家自らの時代認識の所産でもある。作家としての作品の創作と文芸批評など、金基鎮の一連の文学的行為それ自体も、1920年代植民地朝鮮の時代的状況の要請に対する作家なりの煩悶、或いは、時代認識の表明であったことは容易に推量できることであろう。こういう意味からすれば、文芸運動の先駆者としての金基鎮の階級文学論の提起は、単なる作家個人のモメントを超えた、より巨視的観点から見つめ直す課題を逆説的に示しているのではなからうか。従って、ここでは彼の階級文学をめぐる議論の背景的土台を文芸議論そのものというよりは、むしろ作家のより具体的な「現実認識」の文脈の中で捜し求めていきたい。

第二に、プロレタリア階級文学の移植過程でなされた作家金基鎮の階級文学に関する所論を最も凝縮的に示していると思われる、いわゆる「形式論」及び「大衆化論」などといった作家の文芸議論を中心に、彼の理論的立場の背景、その狙いと含意などを追究していきたい。検討にあたっては、作家の文芸論そのものが志向した植民地の大衆という明確な物体を常に念頭におきつつ、作家が模索していた文学の目標が果たしてどこにあったのかを追っていきたい。

如上の金基鎮におけるプロ文学の目標とその意味の確認に基づき、最後には、

彼の文学論の命脈的系譜を次なる課題の展望として示しておきたい。この場合、同様にプロ文学を志向し、それを植民地朝鮮の「現実認識」を通して具体化していた、「帝国」日本のプロ文学の先駆者の一人である中西伊之助は多くの側面で示唆に富んだ作家であったといっていよう。両者は海峡の両側で活動した同時代の文人であると同時に、金基鎮の日本留学期の階級文学への触発とその受容に直接的影響を与えた一人でもあり、とりわけ中西の階級文学と金基鎮のそれとは、その原点と契機において一抹の脈絡的共時性が見出せるからである⁷⁾。

では、節を改めて、まずは1920年前後の植民地朝鮮社会の一連の新たな活路の模索と方向転換の軌跡をたどる中で、作家金基鎮の文学的探索の方向とその意味を追っていきたい。

二 金基鎮におけるプロレタリア階級文学の原基とその契機

(1) 形成期の金基鎮文学の基調

金基鎮のプロ文学論をめぐるこれまでの研究の盲点の一つは、東京留学期における彼の一連の社会主義思想——より正確には、社会主義思想の文学——との出会いそれ自体を彼のプロ文学論の前提として既定化していることである。留学期の社会主義思想との遭遇そのものを彼のプロ文学の契機と直裁に結び付けられることによって、例えば、なぜ、彼が階級文学への傾倒し、それを植民地朝鮮の文壇に紹介しようとしたのかといった、背景的動因、及びその文脈の含意に対する議論が最初から度外視されてしまったことは否めない事実であろう。

当然な帰結として、社会主義思想との遭遇そのものを金基鎮のプロ文学論の出発点として位置づける既往の研究におけるこうした前提的視角からすれば、その議論の矛盾的帰納として導き出された、例えば、なぜ、彼の階級文学論が限界性を内包し、ついには林和、安漠などといった後発のプロ文学のイデオログたちによって破滅的攻勢にさらされていたのか、といった一連の問題が釈然と解明され得ない。それは、結局のところ、植民地朝鮮と「帝国」日本との異なる時代状況、或いは、作家自身における思惟の不備として終始され、容

易に「革命的浪漫性の表出」として位置づけられてしまったことも故なきことでもなかったのである⁸⁾。

既往の研究が一様に論じているように、金基鎮のプロレタリア文芸論導入の直接的契機となるのは、日本の文壇とその思想界の動向であった。なかでも、特にロシア革命の擁護という立場からアナキスト、自由主義者、労働文学作家などといった進歩的知識人を一つの戦線として糾合した雑誌『種蒔く人』(1921年創刊)を媒介とするものであった⁹⁾。

確かに、日本プロレタリア文学運動の本格的出発点として位置付けられる¹⁰⁾雑誌『種蒔く人』そのものの位相からすれば、当初より文学を志していた金基鎮にとって同雑誌は注目の対象となっていたものと思われ、また、彼の文学観の形成に一定の影響を与えていたことは、彼の述懐からもうかがうことができる。即ち、いわゆる朝鮮「3・1独立運動」を契機に、それまで在学していた京城の培材高等普通学校での学業を中断しては翌年の1920年に渡日し、一文学徒として立教大学で修学していた彼は、本来、「(私は——筆者)文学思潮上では新浪漫派の思想をもった芸術至上主義論者であり、詩作法においては象徴主義にしたがう文学徒¹¹⁾」であった。しかしながら、それまでのいわば「芸術のための文学」を志向していた初期文学的立場から「人生のための芸術」へと全く異なる作家的目標を探し求めてゆくその背景には、まさに雑誌『種蒔く人』が存在しており¹²⁾、それに対する彼の関心も格別なものがあつたと推量できる。

ここで留意すべきは、そもそも雑誌『種蒔く人』は、小牧近江がフランス留学中にアンリ・バルビュス(H. Barbusse)のクラルテ(Clarte「光明」)運動に影響を受け、その伝播の一環として日本帰国の後に刊行した雑誌であった。しかもそれは、最初から労働階級を主要対象としたものというよりは、むしろ、その出発点となっていたのは、反戦・平和をモットーとする啓蒙的世界平和主義の標榜であり、大衆啓蒙の担い手としてのインテリゲンチヤの役割要求を射程に入れた雑誌であったという点である¹³⁾。実際に、東京留学期を通して金基鎮に深い感銘を与え、のちに彼の文学的進路を決定づけていたのは、雑誌『種蒔く人』を介在とするクラルテ運動そのものに他ならなかったのである¹⁴⁾。要するに、雑誌『種蒔く人』は、最初からプロレタリア階級文学を直接的目的と

していたものではなく、その上、金基鎮の『種蒔く人』との接点は、雑誌そのものというより、それを介在とするクラルテ運動を直接的契機としていたものである。事実上、同雑誌は思想的純化をへて、次第にプロレタリア階級文学の中心雑誌として理論的土台を提供していくものであり、その背景には、当時の社会主義思想と階級文学の急速な成長が主因となっていたのである。してみれば、1921年の春ごろと思われる金基鎮の雑誌『種蒔く人』との出会いそのもの¹⁵⁾、時期的には雑誌の草創期であったことを見逃すわけにはいかない。

さらに、金基鎮自らが明らかにしているように、実際に、この雑誌を通して彼が学び取っていたのは、一文学徒が文学の道を暗中模索している際に、おりしもロマン・ロラン (R. Rolland) とアンリ・バルビュスとの間で交わされる知的思想行為をめぐる一連の論争における後者のバルビュスが提起した知識人の実践的行動論——まさに作家としての現実認識とその役割を想定するものとして——であった。とりわけ、そこから彼が作家として全うすべき使命感を会得したという、ある種の感銘的影響だったのである¹⁶⁾。勿論、その延長線上には、実践的行動の客体として大衆が存在するものだが、未だ大衆の実態は漠然とした集合体に過ぎず、あくまでも芸術家としての作家が志向すべき方向の設定であり、必ずしも理論的体系化といった階級文学の本領の体得ではなかったのである。

このことは、後述の如く、1923年の帰国直後、朝鮮文壇が取るべき文学方法の一環として執筆される一連の評論の中で提示されており、次の一文は、そもそも彼の文学観がどのようなものであったかをうかがう上で一抹の端緒を提供する。例えば、「彼らは（朝鮮の浪漫主義者文士——筆者）、社会がどのようなになっても美さえ創造すればよいと思っているのである。食べていけない民衆に何の美があるのか？—中略— 朝鮮において何の自由があり、美の創造なんかできる余裕があるのか？」といった¹⁷⁾、彼の言辞そのものが示すのは、あくまでも未だ芸術至上主義的自己幻想に陥っている朝鮮の文士諸位に対する一種の警鐘である。さらに、「朝鮮においてどのような文学が必要であるかという、多大数の教化文学が必要である。従って、農村僻地の文盲の同胞に国文を教えるのがいかに緊要なことかは改めて言うまでもないことだろう」とし¹⁸⁾、彼が

バルビュスから学び取った知識人の実践的行動とは、まさに知識人としての文士がなすべき文学的实践に他ならなかった。

このように、文学をもって民衆を教化するという、いわば文学的啓蒙が明確に示され、決して階級文学の実践的催促そのものではなかった。彼のかかる言説の文脈からすれば、ここで提起する人民の教化とは、少数の既成の支配階級に対極的に存在する「多大数」の無産者被虐待層の大衆であり、それは包括的意味での植民地そのものに違いない。こうした意味で、李光洙の文学に代表される韓国の新文学形成期における啓蒙主義文学が知識人中心のエリート的発想であったとするならば¹⁹⁾、金基鎮における啓蒙文学とは、彼のその後におけるプロレタリア文芸論を考慮するならば、主体的大衆の設定とその力量を想定した意識的教化ともいえようか。

一方、ここで、金基鎮の文学による大衆の「教化」という課題の中には、いうまでもなくその主体的対象として、かつ無産階級としての広範な大衆が位置づけられていることは暗黙の前提となる²⁰⁾。このことは、金基鎮のプロ文学論が、最初からプロレタリア大衆階級を直接的対象とする本格的な階級文学論として明示化されてはいなかったとはいえ、自ら触れている「教化文学」が含意するその範囲が、そもそも無産大衆を直接的対象と想定するものであり、階級意識を強く意識していたことは決して看過してならないだろう。その大衆への意識的志向こそプロ文学論の本格的展開であり、こういう側面では、彼の初期の文学論の中ですでに階級文学の兆しがある中で芽生えていたことは間違いない。のちに彼による PASKYULA (パスキュラ)、さらには KAPF といったプロレタリア文学団体の主導的組織もその延長線上で生まれたものというべきであろう。

さて、こうした彼のプロ文学の受容と朝鮮文壇への紹介、さらには、植民地民衆を直接的対象とする文学的実践の呼びかけは、果たしてどのような背景の下でなされていたものだったのだろうか。今しばらく、作家の文学論を大きく規定し、方向付けていたと思われるその背景的動因を追究していきたい。

（2）金基鎮文学の胚胎的契機

金基鎮自らの述懐を通して確認できることだが、植民地朝鮮を生きた多くの知識人と同様に、彼も常に時代的現実を直視し、その中でなすべき自分の役割を模索していた植民地の一知識青年であった。

1921年、在学中の立教大学の子科生として、一時帰省の際に自ら覚悟を改め、支配者たる「帝国」日本を克服すべき対象として想定し、さらには西洋に近づくという最終的目標の実現のために、まずは実力の備蓄を植民地朝鮮の最も重要な課題として見て取っていた金基鎮の留学当初の心境は²¹⁾、文学を志し、その方向を模索していた彼が、何を考え、また、そのためには何をすべきかを自問していたはずの彼の姿勢をうかがう上で示唆するところがあるように思われる。即ち、少なくとも前述の文学観とその心境からすれば、多くの植民地の知識人と同様に、彼もまた祖国の解放とそのためになすべき役割とその手段を模索していた一人であったということである。ここで、文学を夢見ていた一青年にとってその手段、つまり民族解放の前提として実力養成とは、まさに文学による大衆の啓蒙、教化に他ならなかったはずである。こうした側面からしても、彼は被圧植民地を生きた知識人の典型像であったといっただろう。

かかる留学当初の祖国の植民地現実に対する彼の心境は、その後の社会主義思想との出会い、或いはその系列の一群の作家文人との接触をもちながら、意識的に一貫として堅持し続けていたことが看取できる。例えば1922年12月6日、彼の文学同志として、ともに文学的「主義」を共有し、時には激しい論争を交わすこととなる朴英熙（号は懐月、1901年～？）あての、「私の頭を最も混乱させるのは「朝鮮」である。近日「朝鮮」という言葉をつぶやくだけでも涙がでる。このような私の現象がいいかどうかはわからないけど、我々は何をしなければならないのか？といったようなことは、永久に我々の脳裏から放れられないことであろう」といった²²⁾、一文の書信からは、彼の文学の原点そのものが、まさに植民地朝鮮の現実を直接的背景とするものであったことが推察可能であり、それと不可分の関係にあったと思われる作家自身の文学観と一知識人の姿が素直に披露されている。

ところで、ここで指摘しておかねばならぬことは、東京留学期における金基

鎮のプロ文学の受容に直接的影響を与えた人物の一人としてしばしば触れられる作家中西伊之助との関係係である²³⁾。少なくとも両者は、階級文学へ収斂される一定の文学様式を共有し、後にはプロレタリア階級文学作家として確固たる名声を得ていたという点からすれば、一見、両者は、プロ文学の教示と受容の関係として成り立つ。だが、金基鎮の形成期文学の基調とその契機に関する上述の議論からすれば、そもそも金基鎮が中西伊之助を通してプロ文学そのものを学び取っていたものと理解するのは、論理的飛躍である。実際、このことは、金基鎮の例えば、「僕は中西伊之助の『楮土に芽ぐむもの』という新刊小説を読んでから何日間も私自身について考え込んでいました。“日本人としても政治的圧迫と経済的搾取、文化的劣等待遇で望む日本帝国主義に対抗する朝鮮人の雄健な姿態をこのように文学化しているのに、お前（金基鎮自身——筆者）は耽美主義やら、芸術至上主義なんかを幻影しているつもりか？”²⁴⁾という言及からも明確に読み取れるように、そもそも彼が中西の作品を通して学び取っていたのは、植民地朝鮮人として、如何にその正体性を忘却していたか、という痛切な自己反省そのものに他ならない。しかも、彼が接していた作品そのものも、惨憺たる植民地朝鮮の現実に対する告発を第一義的課題とする、いわばヒューマンイズムの具現であり、階級文学の本領そのものではなかったことを喚起しておかねばならないだろう²⁵⁾。

このように、当初の金基鎮の文学の目標が、少なくとも階級闘争の社会主義革命文学の実践ではなかったことは疑う余地もない。後日、自らの例えば、「文学思想が現実から流離できないことである以上、人間の尊重と自由・正義・真実を求め、その実現のために筆をもって戦うのが文筆家の理想的な使命と考えるようになった」といった述懐は²⁶⁾、まさに植民地の苦難の現実認識を背景とした自己課題、即ち、作家としての使命認識に他ならず、当然ながら、それは植民地朝鮮人としての正体性を前提とするものであったはずである。プロ文学の実践ではなかった、こうした彼の課題認識からすれば、その文学対象の範疇が、彼自らが設定しているような「無産階級だけがプロレタリアではない。全世界の被虐待人口すべてがプロレタリアである。従って（プロレタリア或いはプロレタリア文学——筆者）は国境がないもの」²⁷⁾であったことはごく自然な認

識であったというべきであろう。

他方、こうした文学対象の範囲そのものは、さらに、その文学目標が、そもそも階級解放の革命的闘争にあったというよりは、むしろ植民地の現実認識から発した人道主義的人間の解放そのものに他ならなかったことを逆照射するものでもあろう。要するに、彼の当初の文学目標からして、階級文学は一つの充分条件に過ぎず、それ自体が決して必要条件ではなかったことを意味するのではなかろうか。このことは、同時に、1925年のKAPFの成立以後、本格的に展開されていた彼のプロ文学論が、なぜ、体験的現実認識の欠けた観念論に陥っていたのかを暗に示すものでもあろう。

さて、ここで留意すべきは、如上の金基鎮の植民地現実認識とその役割の自覚には、植民地朝鮮社会における当時の新たな活路の模索とは決して無縁のものではなかったことである。そこで、1920年代の植民地朝鮮における思想的背景を一瞥するなかで、金基鎮の文学的「主義」の位置を策定しておきたい。

金基鎮のプロ文学論の形成過程が、まさに植民地朝鮮において社会主義思想とその運動が本格的に展開される時期とほぼ軌を一にしていたことは注目に値する。すでに指摘されているとおり、1919年の朝鮮独立運動以後における社会主義思想の朝鮮への流入と急速な普及の背景には、ロシア革命の直・間接的影響があったものの、何よりも植民地下の現実そのものが民族解放の一つの手段として社会主義思想の流入を助長していたという側面があったこと、従って、当時の民族解放運動には、民族的社会主義、ないしは社会主義的民族主義の色彩が色濃く内在されていた²⁸⁾。

植民地朝鮮における社会主義思想の流入の契機が社会主義生成の内在的構造ではなく、むしろ反植民地運動の一環として展開されていたとするならば、当然ながら、プロ文学運動そのものが反植民民族運動と接脈していたことは容易に推量できよう。このことは、前述の如きプロレタリア文芸論の受容過程を通して金基鎮自らが常に意識していた植民地の現実認識と照らし合わせてみても同根の脈絡で理解できる。当時、彼は留学中の身であったものの、早くも1921年の夏休みの間に帰省しており、また在朝、或いは留学同僚の諸文士と絶えずやり取りと交際をしていたことを鑑みれば、当時の朝鮮における社会主

義の思想的風靡も十分察知していたに違いない。

このように、金基鎮の東京留学期は、これまでの研究が議論の前提として据えてきた、社会主義思想に基づいたプロ文学の土台構築というよりは、むしろ、当初、彼が夢見ていた「芸術至上主義」、「耽美主義」の文学に対するこれまで幻影の放擲とそれに代わる新たな覚悟としてのいわば「文学の効用性」という課題を作家自身に課した、作家意識の発現とその構築期とも言うべきではなからうか。勿論、その背景には、まず、同時代の植民地朝鮮における知識人の普遍的な姿でもあった現実の直視とその役割の認識という、いわば時代精神が土台となっていたという点、さらに、その背後には、1919年のいわゆる「3・1独立運動」以後の当時の朝鮮社会の新たな活路の模索の結果として台頭しつつあった社会主義思想という巨大談論の流れの中で形付けられていたことは言うまでもない。

してみれば、かかる背景をもっていた金基鎮のプロレタリア文芸論とは、あくまでもその追求すべき方向、或いは、方法の提示に過ぎず、決して整然とした一つの文芸理論として構築されたものではなかったことを意味する。そもそも階級文学論の前提的条件を具備していなかったが故にこそ、その階級文学に対する自説は、観念的・抽象的にならざるを得なかった必然性をその内部に孕んでいたと言わなければならない。これまで多くの研究がしばしば指摘してきた、彼のプロレタリア階級文芸論における不備、或いは、その限界性それ自体は、まさに上述の如き彼の階級文学論の胚胎的動因からすれば至極当然な帰結であったと見るべきではなからうか。

では、節を改めて、以上の金基鎮のプロ文学の基調とその契機が、帰国とともに本格的に展開される、いわゆる「形式論」、「大衆芸術論」などといった彼の一連の文芸論をどのように規定していたのかを確認するとともに、その意味に触れておきたい。

三 いわゆる「形式論」と「大衆芸術論」にみる階級文学論の基調

金基鎮のプロ文学論の出発点が、植民地朝鮮の現実認識から発した作家としての実践的使命意識がその土台となっていたことは前節を通して確認してきた

ところである。彼自身が東京留学期を通して接していたプロ文学は、その実践方法を模索していた彼にとっては格好の選択肢でもあったということもできよう。かかる金基鎮における文学の原点とその契機が、1925年のKAPF結成とともに本格的に展開される彼の一連の階級文学論そのものを根底から規定していたことは想像に難くない。

金基鎮のプロ文学に対する認識とその立場は、まず、彼の文学的同僚であった作家朴英熙との間で交わされる一連の論争を通して具体的に示される。現に、いわゆる「形式論」として知られるこの論争は、そもそも朴英熙の『戦闘』(1925年)、『徹夜』(1926年)、『地獄巡礼』(1926年)などといった一連の作品をめぐる金基鎮の問題提起から発したものであった。これら作品は、そのいずれにおいても革命的階級闘争を主題とした短編小説であったが、ここにおいて金基鎮は、朴英熙のこれら作品が主題の伝達だけを目的とし、小説が具備すべき構造とその形式を排除している側面を指摘する。それと同時に、階級文学も、あくまでも文学作品でなければならず、その前提的条件として芸術的形式の重要性を力説しているのである。こうした主張は、例えば「小説は一つの建築である。柱もなく垂木もない、赤い屋根だけがある建物というのがあるものか!」という²⁹⁾、彼のいわゆる「小説建築論」を通して最も簡明に示される。一方、これに対し、朴英熙は、「プロレタリアの専門化が一つの建物だとすれば、プロレタリア芸術は、その構成物の中の一つであり、垂木にも屋根にもなれる」とし、植民地朝鮮でのプロ文学の時機尚早の認識に基づき、階級文学の文学的要素の具備よりは、むしろその理念を如何に確実と伝えるかという、機能的側面を第一義的目標とすべきことを主張したものである³⁰⁾。

文学の内容そのものが一定の文学的形式によって形付けられる側面を考慮するならば、文学における内容と形式の問題は決して一刀両断できるものではない。だが、少なくとも階級文学の「社会性」という視点からすれば、上述の両者の階級文学をめぐる認識の濃淡は明らかに異なる。即ち、両者は社会認識の一つの通路としての文学とその役割という、同根の目標を堅持しつつも、文学の形式という内的条件を優先視する前者が形式の枠組みをもって文学の絶対性を主張しようとしたとすれば、後者は、あくまでも社会的要求の表現の手段と

いう、機能的側面において文学を位置づけており、文学は、表現方法の一つとしてプロ文学の主題であるウクラド的諸矛盾を表現する直裁的手段でなければならなかったのである。

このように、金基鎮における社会は文学の中に包摂された形をもって表現される、いわば客体的対象として存在する。これに対し、朴英熙において文学とは、社会構成体の一部として社会に奉仕しなければならない従属物となっており、少なくとも文学と社会との関係設定においては金基鎮のそれとは対極的なものと認識されている。こうした意味で、金基鎮のプロ文学論に占める「社会性」の軽重の側面からすれば、その相対的軽さは明らかである。それは、極言するならば、金基鎮における「形式論」そのものが、徹底とした理念的発想に基づいた議論ではなかったこと、より正確に言うならば、「理念性」を含んだ「文学性」を堅持していた彼の作家意識の発露であったことを逆説的に示しているといえよう。それは、彼が留学当初まで堅持し続けていた文学的姿勢でもあったことを今一度想起し直すならばあるべき自然な理路でもあったということとはできないだろうか。

一方、ここで、文学と社会の関係を如何に設定するかという、ソクラテス以来の文学の本質に関する宿命的課題が、当時の植民地朝鮮の新生プロレタリア階級文壇の内部、しかもそのリーダー的存在によって触発されていたという事実とその意味を指摘しておかねばならない。まず、両者の議論が今後のあるべき姿としての文学の方向を提示しようとしていたという点で、それは階級文学の本格的展開の始まりでもあったといつてよかろう。さらに、階級文学内部における議論の展開と同時に、その他方では階級文学の対抗的勢力として、「朝鮮主義」を標榜する「国民文学派」の形成を誘発するきっかけとなり³¹⁾、両者の議論そのものが胎動期の朝鮮文壇に与えた影響は決して少なくないという点である。

こうしたプロレタリア階級文学の形成期における金基鎮と朴英熙との論争は、その後、金基鎮の「無産文芸作品と無産文芸批評」（『朝鮮文壇』1927年2月）と朴英熙「文学批評の形式派とマルクス主義」（『朝鮮文壇』1927年3月）を通して繰り返される。その内容は、前年の議論を踏襲した形で展開されるの

だが、ここにおいて金基鎮は、文学的形式を具備しない朴英熙の文学を単なる「宣伝文学」として位置づけ、彼の文学的価値を否定しており³²⁾、創作方法論をめぐる当初の議論がやがて極限的対立としてエスカレートしてゆく様相を呈している。

さて、金基鎮と朴英熙が堅持していた対立的姿勢とその主張は、これら兩人が KAPF 文壇を主導していたリーダーでもあり、文壇内のその位相からすれば、対立の激化は文壇そのものの崩壊と繋がりがかねない危険性を孕んでいたといえよう。それだけに、文壇内部の調整をへて当初の問題の提起者でもあった金基鎮が自説を撤回することをもって一段落するものの³³⁾、「理念」より「文学性」を志向する彼の「形式論」における文学路線は、その後、いわゆる「大衆芸術論」、即ち、「大衆化論」を通してそのまま継承されてゆく。

ここで触れる「大衆芸術論」とは、プロレタリア独裁社会の実現に向けて文学が取るべき一つの方法として、プロ文学も通俗小説、大衆小説を通して積極的に大衆の関心を引き付けるとともに、意識化していかなばならないその課題と方法を論じたものである。「大衆化論」の提起そのものが、そもそもプロレタリア階級のための全面闘争の目標を取り上げ、それに相応しい徹底とした実践的理念文学の目標を定めた1927年9月における KAPF の方向転換を契機としつつ、林和に代表される急進的少壮派イデオログによる上述の金基鎮の「形式論」に対する激しい批判の中で打ち出され、KAPF 文壇の内部方針と歩調を合わせる形で出された議論であったことを鑑みれば³⁴⁾、「大衆化論」は KAPF の方向転換の一環として、当然、それとは順方向のパラレルな関係をたもち、決して背理するものではなかったはずである。

だが、まず、ここで看過してならぬことは、議論の前提となる大衆を果たして当人の金基鎮はどのように認識していたかという問題である。彼のいわゆる「大衆化論」を最も含蓄的に示していると思われる「大衆小説論」を見る限り³⁵⁾、大衆は、「無知で鈍感な存在であり、将来の希望と勇気が麻痺され、下品な享楽と奴隸的奉仕の精神に染まった退治困難な中毒者」³⁶⁾として位置づけられ、その主な特徴として極端と大衆の力量が過小評価されている。しかも、大衆それ自体に対する視角も、例えばプロレタリア大衆、農民大衆、小市民大

衆などといった、大衆の階級的諸範疇を度外視した、画一的な客体として捉えられていることを見逃すわけにはいかない。このことは、彼の大衆に対する階級的認識の脆さを傍証するものでもあり、主体的力量を具有していないが故に、大衆は階級的存在以前の、むしろ教化の対象としてしか存在しなかったことは故無きことでもなかったはずである。

かかる彼の大衆認識は、当然ながら、作品の創作においてもそれに相応しい具体的方法が提示される。即ち、物語が大衆の好奇心を引き出す上で、作品の具体的表紙がもつ重要性を改めて強調し、また、大きい活字、低価格、平易な文章、さらには好色漢、薄命哀歎といった主題を取り上げるメリットを説いており、階級文学の興味問題に格別な注意を鼓吹している³⁷⁾。こうした認識に基づき、より包括的な創作方法として、「大衆小説論」を通して、具体的に何を、どう書くべきかについて新たな指針を出しているが、その主な内容をまとめて提示するならばおよそ次のようなものとなる³⁸⁾。

まず、何を書くべきかについては、労働者と農民の日常生活の見聞、物質生活の不公平と不合理性、迷信と奴隷精神および宿命論的思想が惹起する悲劇的現実を描くと同時に、それに対する希望と勇氣に満ちた健康な人生観、新旧道徳の衝突による家庭の破壊と新思想の勝利、貧富葛藤と正義の勝利、男女の恋愛などがあげられる。さらに、その描写方法としては、平易で韻文的な文章の駆使、華麗な文章、描写と事件は簡潔にすること、性格よりも人物のおかれた境遇に対する集中的な描写、心理描写よりは事件の起伏を描くこと、作品の構想と表現手法は直観的・現実的・実在的・具体的事実主義の態度が取るべき方法として提示される。

如上の金基鎮の「大衆小説論」における創作方法を見るならば、まず、第一に、彼の議論を最も集約的に示している「大衆小説論」そのものが、原論的レベルでのプロレタリア階級文学の具備条件に過ぎないという点を指摘しておかねばならないだろう。このことは、前述のとおり、彼の大衆認識の相対的脆さと直接的に相互規定し合う側面を有するものであったことは言うまでもない。さらに、第二に、彼のいわゆる「大衆芸術化論」が、そもそも KAPF の方向転換に際して、その課題として提起された、より政治性の強い理念文学の闘争

的展開という文壇内部の方針の一環として出された議論だったにも関わらず、その基調は、プロ文学もあくまでも「文学性」を具有し、文学的説得力をもって大衆に浸透すべき課題が主張されており、こうした側面からすれば、むしろ、先の彼の「形式論」の継承であり、かつその具体的方法論の提示に他ならなかった。従って、KAPF 文壇の内部において妥協的で穏健的な行為として読み取られ、とりわけ一団のイデオログ少壮派文人によって無視、或いは非難的となっていたことは容易に想像できるだろう。

このように、金基鎮の「大衆芸術論」におけるかかる大衆認識は、そもそも彼のプロ文学への背景的動因とその契機が植民地朝鮮の現実直視と大衆啓蒙の一つの方法的選択の産物であったことを論じてきた先の言及に鑑みれば、両者は決して齟齬してはならず、むしろ、彼の当初の文学的契機とその動因を脈絡的に継承するものであったことを改めて指摘しておかねばならないだろう。

結びにかえて

小論は、植民地朝鮮の黎明期文壇にプロレタリア階級文芸を導入し、主導的にその理論を展開していた作家かつ文芸批評家の金基鎮を取り上げ、主に彼のプロ文学論の背景的土台とその契機を中心に触れてきた。最後に、ここでは触れるべき若干の論点を整理するとともに、あわせて金基鎮のプロ文学論と同時代の日本のプロレタリア作家中西伊之助との脈絡的接点とその意味を展望として示して結びとしたい。

まず、そもそも金基鎮の社会主義との出会いとその文芸理論の受容の背景には、彼自身のモメントを超えた、より大きな課題としての植民地朝鮮という現実直視が介在していたことを指摘しておかねばならないだろう。要するに、彼のプロ文学論の提起そのものは、植民地朝鮮社会の時代的要請の産物であり、逆に、彼自身の現実認識の所産でもあったといえよう。1919年の「3・1独立運動」を前後とする植民地朝鮮における社会主義思想の台頭とその展開は、そもそも民族独立運動の一つの方便として援用されたものであり、金基鎮の階級文学の提起も、その実、植民地朝鮮が志向すべき新たな方向提示の一環としてなされた、いわば文学的模索の産物であった³⁹⁾。こうした意味で、彼のプロレ

タリア階級文芸論は、当時の時代的狀況と社会的要請に対する自分なりの煩悶の路上で見つけ出した一つの有効な選択肢と看做して大過ないだろう。

如上の金基鎮のプロ文学論の背景的土台は、既往の研究を通して、例えば、彼の階級文学論における「不備」、「未熟さ」、或いは、「速断的流行性の伝播」、「現実的体験を度外視した観念的」⁴⁰⁾、さらには「階級文学論というよりは、むしろ革命的浪漫性の強い個人意識の表出」として位置づけられがちであった、その限界性に対する問題の所在が果たしてどこにあったのかを逆照射するものであった。要するに、文学を夢見ていた一知識青年が身のまわりを直視し、しかるべき役割を探し求めてゆく路上で、一つの有効な方法かつ方向として採択されたプロ文学は、その前提として予め付与されたものではなく、暗中模索の途上で遭遇した一つの代案であったというべきであろう。敢えて言うならば、金基鎮が東京留学期を通して試みていた文学的模索の路程で出会った階級文学それ自体は、あくまでも一つの手段であって、決してそれ自体が最終的ゴールではなかったことになる。このことは、確認のごとく、なぜ、彼の「主義」が、文学様式の一つとして文学の中で再生、還元されねばならなかったのかという、当為性の所以でもあったのである。

さて、如上の金基鎮のプロ文学の相貌——少なくともその基調とその契機という観点からすれば——からは、多くの側面で作家中西伊之助との間で存在する脈絡的類似性に気づかされるのである。

まず、皮相的な側面で両者は、海峡の両側で活動した同時代の文人であると同時に、とりわけ作家中西は金基鎮の日本留学期におけるプロレタリア階級文芸との接点に直接的かかわりをもつ一人でもあった。何よりも、両者における階級文学の受容そのものが、文学方法の大前提として予め設定された目標ではなかったということである。小論を通して確認してきたように、前者の金基鎮における階級文学が現実的手段として採用された選択肢であったのと同様に、後者の作家中西におけるプロ文学も、作家の履歴的諸経験を形象化する媒介体としての植民地朝鮮という「外像」との遭遇を通して胚胎され、形付けられたものである⁴¹⁾。即ち、金基鎮におけるプロ文学が植民地祖国という主観的自己認識をその契機とするものであったとするならば、中西のそれは、自分の数奇

な運命的現実を植民地朝鮮という他者を通して客観化していく中で胚胎されていたという側面で、その類似性と命脈的つながりを見出せるのである。

かかる文学的動因から導き出される文学目標が志向するそのベクトルは、無産者大衆の階級的解放、換言するならば、体制的・理念的演算からなる解放というよりも、むしろより包括的意味での大衆解放に他ならず、それは、例えば「人道主義」文学として置き換えられるものでもある。こうした意味において植民地朝鮮とは、彼ら両者が経由せずには見出せなかった文学の原点でもあったとって間違いあるまい。とりわけ、当事者というべき金基鎮の例えば、「無産階級だけがプロレタリアではない。全世界の被虐待人口すべてがプロレタリアである」という一句は、まさにこうした脈絡で理解でき、彼の文学目標における切迫性がうかがわれるのである。これら両者におけるプロレタリア階級文学の命脈的つながりは、その動因からして最初から論理的当為性を具有すると同時に、帰結的正当性をも内包するものであったというべきかも知れない。作家中西伊之助と金基鎮との両者におけるプロレタリア文学の命脈関係の詳細とその含意などに関するしかるべき検討は後考を待ちたい。

注

- 1) 白鐵・李秉岐『国文学全史』新丘文化社、1980年、330頁。
- 2) 近年の代表的研究として、李修京『近代韓国の知識人と国際平和運動—金基鎮、小牧近江、アンリ・パルピュス—』明石書店、2003年。とりわけ、氏の第1章「八峰金基鎮の初期文学思想の形成—日本留学とKAPF結成までの動向を中心として—」、及び、第4章「植民地中期の朝鮮社会と金基鎮の活動の考察」があげられよう。その他、専論ではないものの、例えば、金允植『韓国近代文芸批評史研究』一志社、1982年、があり、また、金榮敏『韓国近代文学批評史』ソミョン出版、1999年、は、金基鎮の評論と朴英熙の理論を取り上げながら初期のプロレタリア文学論を整理している。さらに、朴ジヨン「八峰金基鎮の初期社会主義思想形成過程—日本社会主義体験と影響—」(『韓国語文学研究』韓国外国語大学韓国語文学研究会、第12集、2000-12)は、金基鎮の日本における社会主義体験とその影響に対する具体的分析を通して作家の初期社会主義思想の形成過程を追究しており、その間の研究の深化が看取できる。
- 3) 李ヒョンウ『八峰金基鎮研究』ウソック大学博士論文、1996年、宋キョンビン『八

- 峰金基鎮小説研究—1920～30年代の作品を中心に—』忠南大学大学院、1990年。
- 4) 例えば、李ミスン「八峰金基鎮文学論研究—形式論を中心に—」（『現代文学研究』ソウル大学現代文学研究会、第85集、1988年）、黄クックミョン「小説大衆化論にあらわれた疎通可能条件研究—八峰金基鎮を中心に—」（『国語国文学』東亜大学国語国文学科、第6集、1985年）、ゾホンギョウ「八峰金基鎮の大衆化論考察」（『人文科学研究』朝鮮大学人文科学研究所、第18集、1996年）、朴ナムフン「金基鎮の大衆化論研究」（『韓国文学論叢』韓国文学会、第11輯、1990年）、洪ソナム「金基鎮文学論研究」（『韓国言語文化研究』第15集、1997年）、ジンチャンヨン「プロ文学論研究—八峰金基鎮を中心に—」（『国語国文学』東亜大学人文科学大学、第9集、1989年）、李ガンス「金基鎮の大衆化論に対するコミュニケーション学的方法的アプローチ」（『冠嶽語文研究』ソウル大学国語国文学科、2000年）、など。
 - 5) 例えば、朴ミョニョン『韓国プロレタリア文学研究』グルブッサ、1992年、41頁。
 - 6) イムギョウチャン『日本プロ文学と韓国プロ文学』研究社、1987年、28頁。
 - 7) 筆者は前稿を通して、とりわけプロレタリア作家中西の原点とその契機を、これまでの多くの研究が主張してきたような、例えば、彼の履歴の産物というより、むしろ植民地朝鮮という「外像」の発見、さらに、そこでの生体験に基づいた実像の確認と、その内面化といった一連の包摂過程を通して形付けられていたことを論じた。詳細は、拙稿「中西伊之助における植民地朝鮮認識の構図—作品『不逞鮮人』を素材に—」（『国際文化研究科論集』愛知県立大学、第13号、2012年）を参照されたい。
 - 8) 例えば、前掲、イムギョウチャン『日本プロ文学と韓国プロ文学』。
 - 9) 例えば、前掲、朴ジョン「八峰金基鎮の初期社会主義思想形成過—日本社会主義体験と影響—」は、最も典型的な立場を提示しているといえよう。
 - 10) 小田切秀雄『現代文学史』集英社、1975年。
 - 11) 前掲、洪廷善編『金八峰文学全集Ⅱ』189頁。
 - 12) 前掲、洪廷善編『金八峰文学全集Ⅱ』99頁。この雑誌に対し、金基鎮は、「この時日本では『種蒔く人』という雑誌があった。小さな総合雑誌だった。僕はこの雑誌の名前がとてもいいと思っていた。それで僕も種蒔く人の一人になりたかった」としており、彼の関心は、どちらかと言うと雑誌『種蒔く人』の皮相的側面にあったのではなかったかと思われる。
 - 13) 山田清三郎『プロレタリア文学史、上』理論社、1977、271頁。
 - 14) 前掲、李修京『近代韓国の知識人と国際平和運動—金基鎮、小牧近江、アンリ・バルビュス—』43頁。
 - 15) 同上、42頁。
 - 16) 前掲、洪廷善編『金八峰文学全集Ⅴ』139頁。

- 17) 前掲、洪廷善編『金八峰文学全集Ⅱ』428頁。
- 18) 同上。
- 19) 前掲、洪ソナム「金基鎮文学論研究」790頁。
- 20) ここで、大衆への意識的アプローチは、当時、マルクス主義の朝鮮植民地への浸潤とは無関係ではなく、彼の文学論そのものも、その実、当時の植民地半島における社会主義思想の展開を背景とするものと見るべきであろう。1920、30年代の植民地朝鮮社会の特徴的様相としての大衆概念を論じている、許スウ「1920～30年代植民地知識人の大衆認識」（『歴史と現実』第77号、2010-9）、は、当時のプロレタリア文芸論を考える際に極めて示唆に富んだ指摘といえよう。
- 21) 洪廷善編『金八峰文学全集Ⅱ』129頁。
- 22) 朴英熙「火焰の中にある書簡綴」（『開闢』63号、2915-11）。
- 23) とりわけ代表的論考として、前掲、朴ジョン「八峰金基鎮の初期社会主義思想形成過程—日本社会主義体験と影響—」があげられよう。
- 24) 前掲、洪廷善編『金八峰文学全集Ⅴ』131頁。
- 25) 詳細は、前掲、拙稿「中西伊之助における植民地朝鮮認識の構図」を参照されたい。
- 26) 前掲、洪廷善編『金八峰文学全集Ⅴ』145頁。
- 27) 前掲、洪廷善編『金八峰文学全集Ⅱ』428頁。
- 28) 趙之薫「韓国民族運動史」（『韓国文化史大系』第1巻、高麗大学民族文化研究所、1979年、737頁）。こうした植民地朝鮮における社会主義の受容の認識は、例えば前掲、金栄敏『韓国近代文学批評史』42頁、においても同様な認識が示されており、歴史、文学を問わず、ほぼ異論のない共感的認識となっていることを付言しておきたい。
- 29) 前掲、洪廷善編『金八峰文学全集Ⅱ』270頁。
- 30) 朴英熙「文芸批評の形式派とマルクス主義」（『朝鮮文壇』3号、1927年）。
- 31) 前掲、ジンチャンヨン「プロ文学論研究—八峰金基鎮を中心に—」227頁。
- 32) 前掲、洪廷善編『金八峰文学全集Ⅱ』270頁。
- 33) 前掲、金允植『韓国近代文芸批評史研究』53頁。
- 34) 前掲、ジンチャンヨン「プロ文学論研究—八峰金基鎮を中心に—」。
- 35) 現に、いわゆる「大衆芸術論」として知られる、金基鎮の文学の大衆化議論は、当初、「通俗小説論」（『朝鮮日報』1928年11月9日）、「大衆小説論」（『東亜日報』1929年4月11日）、「短編叙事詩」（『朝鮮文芸』1929年1月）、「芸術運動の1年間」（『朝鮮之光』1931年1月）といった一連の論考を通して披瀝されたものである。
- 36) 前掲、洪廷善編『金八峰文学全集Ⅰ』130頁。
- 37) 同上、136頁。
- 38) 同上、136～137頁。

- 39) こうした認識は、韓国近現代文学に関する独歩的境地を構築してきた金允植によってすでに示されており、その中でプロレタリア階級文学は、むしろ「民族文学」として位置づけられる。詳細は、同『韓国現代文学批評史』ソウル大学出版部、1982年、113頁、を参照されたい。
- 40) 前掲、ジンチャンヨン「プロ文学論研究—八峰金基鎮を中心に—」240頁。論者によれば、金基鎮の体験なき観念に始終したプロ文学論は、結局のところ、その後における彼の「帝国」日本との野合へと導く論理的根拠を提供するものと見て取る。
- 41) 詳細は前掲、拙稿「中西伊之助における植民地朝鮮認識の構図—作品『不逞鮮人』を素材に—」を参照されたい。